随想

ふるさと（二）

加藤策二
（会員 [redacted]）

春から秋にかけて各地で祭りが行われる。祭りの風景は何とはなしに人々の心を浮き立たせる。

祭りには様々な形態がある。豊作祈願・お祝い・五穀豊穣の御礼・商売繁盛祈願・無病息災の祈り等々、多種多様なものがあり、それが全ての契機となり人々の営みを形づくっている。生活と密接に結びついている。そこには、楽しい思い出もあれば悲しい思い出もある。その一コマを紹介しよう。

（一）のぼり揚げ

三月三日桃の節句に、故郷では男の子（長男）の生誕を祝ってのぼり（凧）上げをする。畳にして三畳敷きぐらいの『のぼり』を揚げ、芸者を呼び近親知己を招き祝宴を催す。我が家の藏の二階の天井には、兄市郎次（昭和四年九月一日九歳没）と私の「のぼり」が残っていた。話によれば、我が家の麦畑に莫蓙（ござ）を敷き御祝いをしていた。この季節は黄砂も飛んでくるように、凧揚げには持って来いの風が吹いている。

空高く舞い上がった私のブンブン（子供らは風になる凧をブンブンと言っていた）は、糸が切れ一里先に飛んで行った。

「のぼり揚げ」は、藩主が江戸参勤の帰り、大凧揚（おおだこあ）げを見てこの地方に広めたという。

叔父作次郎は、元佐伯高女（現市役所）と野村の肉屋の間の鍵野家に養子に行き桶屋をやっていた。私は兄市郎次が夭折（ようせつ）しなければ叔父の家の養子になったであろう。故に策二と名付けられている。兄は昭和四年小学校二年の夏休みに脳膜炎を患い、九月一日学校に行きたいと言いながらなくなった。一学期副級長をしていたという。

（二）雛祭り三題

○床の間には長姉「せつ」が買って貰った五段の雛人形が飾ってあった。次姉が友達と遊び腕の曲げた官女もあっ

た。下段には唐津焼の人形が数体あり、その下に蓬や白や赤の色粉を混ぜた菱餅が三宝に載っていた。両脇には我が家に植えている桃の蕾がふくらんでいる枝と、今を盛りに咲き誇っている花桃が飾られていた。女子供は川の縁で蓬の新芽を摘んで帰った。当時は犬の飼育も少なく野は綺麗であった。草餅は早く傷むので餡こを包み、子供らは我先にと食べていた。

近くに家大工の棟梁の家があり、女学校も「せつ」の一年先輩の「たみ」さんがいた。弟は江藤勇君と言い私より一級下、中学一年から陸軍幼年学校に入った。八畳の子供部屋には五段の立派な雛飾りがあった。脇には当時としては珍しいピアノが置いてあった。姉達女子四～五人で遊びに行き、トランプや百人一首に興じていた。

この頃、小学校高学年になると女の子は百人一首で遊んでいた。

○昭和二十五年、私は二十一歳、弟市三（元佐伯駅前郵便局長・平成十四年没）は、高校三年、当時の茨城県の高校進学率は三十八％、安月給で良く学校に行かせたものである。姉セツは二年前結婚して長女洋子が生まれていた。お雛様を届けようにも子供だけの我が家では、到底立派な人形は買えないので、ガラスの箱に入った小さな人形を送った。その時三千円ぐらいしたであろうか?。寂しい限りであった。その頃独立して製材所を開いていた義兄は、翌年立派な雛壇を購って祝っていた。

○私の妻宏子は佐伯市戸穴出身の昭和十一年生まれ。

当時父親も元気で建築請負、朝日新聞販売店を開いていたという。長女でもあり立派な五段の雛飾りがあったそうだ。雛人形に根強い愛着を持っていたのであろう。東京に二人で飛び出して、三・四年してガラスの箱に入った小さな雛飾りを買ってきた。

上池台に来て、仲間と「真多呂人形」の会に入り、息子の武者人形を作り、二年目に大きな立派な内裏様を作った。

緑ケ丘に来て、お節句には両方持ち出し、床の間に飾り好きなお茶を点てて楽しんでいた。桜餅は土浦のお茶に使う和菓子屋で買ってきていた。お薄も美味しかった。懐かしい思い出である。子供の頃を懐かしんで買ったのか、新しい百人一首も残っている。

何度か探してみたが内裏様は見つからない。お茶碗も三十脚程ある。五十六年二人で唐津に行き、中里太郎右衛門さん作の茶碗を求めた。百二十万円渡し不足は後日銀行で振り込んだ。代価は百七十万円。お蔭で博多での宿はビジネスホテルで辛抱した。宏子死去後、仙台より商人が買いに来たが断った。この茶碗も何処にいったかわからない。

(三) 春まつり

私は祭りが大好き。佐伯は城村（現堅田・上城、下城）城八幡の祭りが始まる。四月三日神武天皇祭、四日の二日間、下城の後藤の叔母の家に行くのを楽しみにしている。我が家の前からバスで大手前へ一・五km、大手前から歩いて二km。旧道を通りトンネルを二つ抜ければ叔母の家である。祖母と姉の二人と染矢の叔母と行った。叔母の家の従兄弟は女五人、男一人。長女は結婚していて（夫は支那事変初戦に戦死）次の二人がお供につき踊っていた。長男（昭和十八年戦死）は杖踊りに出ていた。

私は叔父から小遣い一円を貰い、おもちゃのタンク（戦車）や連発ピストルを買うのが楽しみであった。

叔父は近隣で魚を売って歩き、叔母は年寄りと牛を飼い田圃を作っていて裕福な様子であった。お宮には昔鬢付け油を取ったと思われる椿の実「かたし」が転がっていた。

私は氏神様の明神さん（五所明神社）の祭典に、幼稚園一年生は駒方、二、三年生は弓持ち、四年、六年は臼坪の杖踊りに出ていて、祭りをゆっくり見物できなかったので特別思い出に残っているのであろう。

県社五所明神は旧佐伯藩の総社である。臼坪と蟹田の境にあり、町の行政は同じ九区だがそれぞれが別会計を持っていた。蟹田は毎年元旦選挙して父が長になっていた。

お社は大同元年に鎮座の古いお宮である。鳥居には古い時代京の社寺方より頂いた「正一位五所明神」の額が掲げてある。子供の頃高いなあと思った三間幅の石段を五十段程上がると、右手に二千数百年経た杉の御神木があり、神社の周囲は三百年経た杉や照葉樹林で覆われていた。神殿に向かって左手奥に藩主が勧請したお稲荷様。その手前に神楽殿があり、一段下がった前庭は佐伯神楽のフィナーレを飾る「湯立て神楽」を舞う広場があった。

小さな谷川に懸かった木橋を渡ると、橋迫神官が住む社務所がある。

右手御神木の奥には末社があり、裏に香華の絶えない御地蔵様があり、脇の山道を登って行くと、戦時中防空監視所が置かれた臼坪山（二一〇メートル）へ出る。

冬祭りは旧暦十一月十五日で甘酒祭りと言う。四五日前に船頭町の浅利麹屋で麹を買って来て、羽釜（はがま）で炊いたご飯と大きいハンド（甕（かめ））に入れて布団を巻いて甘酒を造る。

新しい足袋と下駄を履き洗い立ての絣の羽織を着て御参りした。十二番佐伯神楽の終わりの頃、大蛇（おろち）に見立てた白布を切る「綱切り舞」と「湯立て神楽」を見るのが楽しみであった。

七月十五日、夏祭りは内町神明さんと同日。酒饅頭、散らし寿司を作り祝う。内町商店街の各店では、見立て細工「造り物（つくりもん）」を競って造り、町民はもとより佐伯九十九浦の人々の見物で夜は大変な賑わいであった。

大祭は四月十五日がお浜出で、旧町内、中村、内町、船頭町の繁華街を道中、一里の道を練り歩き三の丸の御旅所に着く。中一晩泊まり、お帰りは十七日。一部道を帰るが来た道を帰る。九十九浦の人々が集まり、一万五千の人口が三倍に膨れ上がる。

御神幸のお供は、先払いにお面を被った猿田彦、道脇に御幣を飾った榊を持ち見物人の頭の上を千才万才とうち振って歩く人（町役場の清掃雇人がなる）、続いて神官、氏子総代の町長が騎馬で、二年交替の稚児女児一人、駒方男児二人が続く。景気づけに一杯飲んだ若者どもが担ぐ御神体の御輿が暴れながら行く。脇を賽銭箱が前になり後ろになり、おひねりを受けながら御供する。稚児、駒方を除き、皆白の狩衣（かりぎぬ）を着ている。御鍵箱、弓、御神刀を持った小さい子、大きい子は長い刀、旗を持って続く。次に町会議員や町の有志が行く。

町方のお供は地元臼坪の杖踊りが一番。これには蟹田の青年の笛吹が付く。中村は笛に合わせての大太鼓の飛び打ち。内町、船頭町は年毎に順番を変え山車を出し、子ども達が踊っている。検番の芸者連が綺麗どころを揃え、ひちりきを囃しながらの山車が続く。

海軍航空隊が出来、六区を初め二～三の区が加わりより賑やかになった。住吉さん、広小路、御旅所には舞台が出来、博多にわかや日舞等が夜まで続き見物人を楽しま

せた。

私も亡兄に続き駒方に出た。幼稚園、一年生の時、県会議員の長男黒田君（小学二年夭折）と一緒であった。稚児は幼稚園の時一年上の高山さん。小学一年の春は出納財閥の次男正三さん（後に加藤製材経理部長でお世話になる。早稲田商科卒）のお嬢さん三春さん。子供の足が大変なので行列は所々で休息する。その際、杖踊りや山車の踊りが催される。

私の付添は大叔母つね（祖父の弟岩蔵の妻）、次の年は中村の叔母つぎが付いてくれた。大きな日傘は専属の傘持ちにお願いし、酒肴とかなりの御礼をあげたようだ。五反歩は小作に出し、祖母が畑一反歩程丹精込め野菜や果物を作っていた。日向蜜柑（みかん）の下に鶏八羽、慶弔用に飼っていた。祭りは女達は大変だ三日前から料理にかかる。

大分の母の兄弟や甥、姪、祖母の親戚や職人の実家、父の弟妹一家を呼んでいた。父は得意先の船頭町「金壺」の醸造元高野金太郎の店の前で飲んでいて、私の歩くのを眺めていた。

我が家の藏には慶弔の膳椀、輪島塗が四十人前、内二十人前は物置に置いていて少々のもてなしには事欠かなかった。

－平成20年の佐伯春祭り－

（上）三の丸の大名行列
（右上）中村地区の山車
（右下）中央通りを進む
船頭町の山車